

## 犬和飼雄教授退職記念号に寄せる

雑誌名	社会労働研究
巻	42
号	4
発行年	1996-02
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00018806">http://hdl.handle.net/10114/00018806</a>

# 犬飼和雄教授退職記念号に寄せる

社会学部長 音 川 實

「中国美人画と日本文化」という講義が社会学部で開かれた。この講義は犬飼先生が法政大学、私たちの社会学部を去るにあたっての最終講義である。教室の壁には中国から持ってこられた「美人画」、「山水画」が沢山掛けられ、通常の講義とは少し変わった雰囲気の中で、巧みな講義構成と特色あるトーンとテンポの話し方で聴く者の心を開き、犬飼先生が意図したものは形を変えることなく受講者に受け入れられた。

中国の古典・文化に興味を持って、独学した中国語を頭に詰め、降り立った中国の地で先生の耳に達した中国の人々の口から発せられる声は雑音（ノイズ、生理学的には意味のない刺激）でしかなかった。勿論、先生の口から出る中国語らしきものは中国人にとってはノイズそのものであったことであろう。多分、人々の声だけでなく、人々の動き、目の前に展開する風景といった刺激さえもすべて先生にとってはノイズであったことであろう。

こんなノイズを中国の文化、そしてそれと独特の文化と思っていた日本文化との関わりについての理解を深めていく刺激に変えていく契機をつくったのは犬飼先生の「好奇心」でした。中国、成都の「錦江ホテル」の入り口でホテルの中へ入ろうとする足を止め、くたくたの心と体を「好奇心」はにぎやかになごやいでいるホテル前の露店の群れへと向かわせたのです。そこで売られていた一枚の美人画は犬飼先生の心を平静に戻し中国文化への入り口となった

のです。独学してきた中国語は中国文化への入り口にはならなかったようです。コミュニケーションにおける言葉の限界を越えた機能を一枚の美人画が果たしたのです。

中国滞在の中で、犬飼先生は自分が子どもの頃から自分では日本独特の食べ物、文化的品々、風習、と教わっていたものの、それもいまや日本から消え去ろうとしているものが、成都の現在の生活の中に数千年に渉って受け継がれながら、日常的なものとして大きな顔でいきいきしていることに衝撃をうけ、日本文化って何だろう、と考え直してみなければと思うに到ったようです。

個性あふれた最終講義は先生がお好きだという若山牧水の歌をシャンソン歌手であり、先生の小説書きの弟子であると自称する小沢さんが歌うことで締めくくられた。

犬飼先生は私たち社会学部では英語の授業を担当されてきました。最終講義の後、沢山の学生がポスターの「美人画」を手にして先生のサインを求めて行列をつくりました。先生は中国語（英語ではない）で何やら私には解説が要る数行を書き、署名なされた。一年の時、あるいは一年、三年と先生に英語の授業をうけたなどという学生たちの列であった。

最終講義の後、犬飼先生の中国での興味深い体験をもっと聞きたいという「好奇心」が集まり、中華料理の卓を囲んだ。集った半分は正に元同僚になろうとしている人、半分は先生のいろいろなかたちのお弟子さん。中国からこられた四川大学の先生である宋さん、日本の大学院で学ぶ陳さんは犬飼先生の「徳」のお弟子さん、日本人の中には先

に登場したシャンソン歌手の小沢さんを含めた「小説書き」のお弟子さん、「魚釣り」、「骨董鑑定」、「英語」、「囲碁」などのお弟子さんが各数名、にぎやかな集まりでした。

中華料理を囲んでの先生の話では、中国語も生活の中でどうやらノイズではなく、言葉として機能させる術を会得したようです。手にした中国語を操り、山水画では著名な画家と言葉のやりとりをし、その言葉が犬飼先生の意図した以上に画家の心を強く打ち、買えば巨費を投じなければならない画をどっさりと無償で手に入れ、日本でその画の展覧会を開いたとのこと。最終講義の中では言葉の限界に触れて美人画や粽のはなしをし、ここでは言葉の持つ魔力的ともいえる強力なはたらきを体験的に説得力あるかたちで示されました。

そんな犬飼先生を第一教養部時代にも同僚であった田中優子さんは日本での「最後の文人」と表現しました。社会学部の教育の中で「最後の文人」が学生に与えたものは大きかった筈です。先生のサインを求めて並んだ学生の顔には先生に教わったことへの満足と誇りが溢れていました。私に「小説の弟子」は無理ですから「教師」で先生の弟子になろうと思います。幸い、犬飼先生は成都に「日本文化研究所」を設立され、そこを日本、中国両文化研究の場としてわたしたちにも提供してくださる計画をお持ちと聞いております。そのような施設を是非お作りいただき、私を含め多くの弟子たちの面倒をみていただきたいものです。そのためにはなんといっても先生には健康でいていただきたいと願っております。

「最後の文人」犬飼先生が法政大学、社会学部に遺して下さったものの大きさに敬意と感謝を込めて本記念号を捧げます。